

〈特 集〉

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会活動報告

永野 康治

(日本女子体育大学健康スポーツ学科准教授, 基礎体力研究所兼任研究員)

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会において、医療ボランティアとして参加する機会を得ましたので、本稿ではその活動内容について雑感を踏まえて報告いたします。本活動について、オリンピック期間では選手村総合診療所における理学療法部門、伊豆サイクリング村（分村）医務室における理学療法部門、バスケットボール（5対5, 3x3）会場における競技会場救護、パラリンピック期間では選手村総合診療所における理学療法部門、サイクリング選手用宿泊施設（分宿）医務室における理学療法部門にて活動しましたので、それぞれについて記載していきます。

・オリンピック選手村総合診療所 理学療法部門

選手村総合診療所（ポリクリニック）は晴海埠頭に設置された選手村（本村）内にある医療施設で内科、外科などの診療科に加え理学療法が開設されており、そのスタッフとして参加いたしました。サービス内容は本邦における一般的な理学療法である徒手療法、物理療法、テーピングなどの提供に加え、コンディショニング用のアイスバスやスポーツマッサージ、鍼も含めた提供内容となりました。これはIOCにおける理学療法の定義がPhysiotherapy and Physiotherapiesとなっており、理学療法およびその関連分野が含まれるためとなります。私はそのうち、理学療法部門におけるコアスタッフとして、理学療法士として参加するスタッフのマネジメントが主な業務となりました。業務は大会前から始まり、2019年の夏ごろからポ

ランティア希望者の面談をオンラインにて行い、その後、選手村での事前研修を担当しました。事前研修は2020年の春から計画していましたが、大会の延期に伴い2021年の春以降に、限られた人数、日程での研修のみを行い、大会における活動に入ることとなりました。

大会時では、選手村の開村（7/13）から開幕前（7/23）を担当しました。開村から数日間は選手村に滞在する選手も少なかったため、ポリクリニック内の運用整備や理学療法室内の準備など（図1, 2）、利用者の受け入れ準備が主な業務となりました。理学療法スタッフは通常10～15名が2シフトに分かれて参加し、入村する選手数の増加に伴いポリクリニックの利用者も増加し、理学療法を希望する選手も増えていくという状況でした。理学療法部門の利用者としては、中東、アフリカ、東欧、中米、中央アジアの利用者が多い印象でした。その背景には、選手団にトレーナーや理学療法士などの医療スタッフが十分に含まれておらず、選手村ポリクリニックに人的、物的資源を期待していたことが考えられます。逆に医療スタッフが十分で選手村の自国宿泊施設内にコンディショニング設備を設置することでできた国の利用は少なかったと思われる。こうした利用者の傾向に伴い、イスラム系の利用者が多くみられました。イスラム系の女性選手に対しては信仰上女性スタッフが理学療法を提供することが必須となりますが、スタッフ内の女性スタッフの割合が少なく、かなりの業務量になっていました。今後の本邦のスポーツ界において、選手のコンディショニ



図1 ポリクリニック理学療法室の入り口



図2 理学療法室内に設置されたアイスバス

ングに関わる女性を増やしていくことが課題であるとも認識できました。また、利用内容として、コンディショニング目的のアイスバスの利用も非常に多くみられました。梅雨明けに伴い、気温が上昇したことも要因として考えられますが、アイスバスの利用が世界的に広がっていることも実感しました。また、今大会では同建物内にフィットネスセンターが開設され、アスレティックトレーナーによるトレーニング指導が初めて行われました。理学療法部門とフィットネス部門も連携をとり、理学療法を受けた選手でさらにトレーニングが必要な選手をフィットネス部門に紹介する形がとられました。こうした連携がとれたことは本大会における特徴だったと言えます。

・オリンピック 伊豆サイクリング村（分村）医務室 理学療法部門

オリンピック期間の後半では、サイクリング競技が行われた伊豆（修善寺）に設置されたサイクリング村（分村）における医務室理学療法部門にて活動しました。この施設は、晴海の本村から離れた場所に競技会場がある選手用の選手村（分村）内にある施設で、施設内の建物を利用して設置されました。理学療法部門の提供内容は基本的には本村と同様でした（物理療法の一部とアイスバスは除く）（図3）。また、本村では理学療法部門とマッサージ・鍼部門は別々の運用をしていましたが、分村では理学療法士3～4名、マッサージ師2名という体制であわせての運用となりました。自転車競技の選手のみが滞在していたため、利用者数はそれほど多くなく、選手団のスタッフが利用することもみられました。私が参加した期間はマウンテンバイク競技が終了し、トラック競技が開催されていた期間で有り、多くの国のトラック競技選手団内にはトレーナーやマッサージ師が帯同していたことも利用者数に影響したと考えられます。医務室内では、ドクター、看護師、薬剤師、組織委員会職員、ボランティアの他職種が共に活動していたため、様々な職種によって医務室運営がなされていることが実感できた活動となりました。



図3 分村医務室における理学療法ブース

・オリンピック バスケットボール競技会場

オリンピック期間中の5日間はバスケットボールの競技会場で選手救護のスタッフとして活動しました。選手救護に関わる職種としては医師、看護師、歯科医師（会場による）、理学療法士に加え、アスリートケアアシスタント（ACA）としてアスレティックトレーナーや鍼灸マッサージ師、柔道整復師が参加してチームを構成しました。大会前には緊急時の搬送、心肺蘇生、応急処置について、事前研修を行い、さらに大会会場でのテストイベント時に競技会場に応じた動きを確認し、大会に臨むこととなりました。大会時においても活動開始時に緊急時対応のシミュレーションを繰り返し行いました（図4）。活動時は理学療法士、ACAあわせて3名が配置され、試合会場だけでは無く、練習会場における不足の事態にも対応するため、シフトを組みながらの活動となりました。また、5対5はさいたまスーパーアリーナ、3x3は青海アーバンスポーツパークでの競技であったため、会場や競技ルールに応じたセッティングを工夫した上での活動となりました。具体的には5対5では外傷発生時にチームトレーナーの対応が認められているが、3x3ではチームトレーナーは試合会場に入ることができないため、救護スタッフがすべての外傷に対応する必要がありました。幸い、活動中に搬送を要する事態は起こりませんでした。不測の事態に備えて準備、



図4 競技会場内に配置した緊急時対応用の物品一式

シミュレーションしておくこと、医師、看護師、トレーナーが連携して準備しておくことの必要性を強く感じた活動でした。

・パラリンピック 選手村総合診療所 理学療法部門

パラリンピック期間においてもポリクリニック理学療法部門におけるスタッフとして3日間活動を行いました。サービス内容はオリンピック時と同様でしたが、様々な障害を有する選手が参加するため、理学療法の必要性はオリンピック以上に高いと予想していました。そのため、理学療法スタッフもオリンピック同等の約10人が日々のシフトに入り活動を行いました。求められる内容も、オリンピックに比べて治療的な側面が高くなるかと考えていましたが、実際の利用者の要求としてはオリンピックと変わらず、少しでもコンディションを向上させることが主であり、パラリンピアンのアスリートとしてのレベルの高さに驚かされるものでした。結果として、実施した理学療法の内容はオリンピック期間とあまり変わらなかったのではないかと思います。ただし、コミュニケーションにおいては英語でのコミュニケーションがとれない場合も多く（中東ではアラビア語、アフリカではフランス語など）、携帯型の翻訳端末を駆使しての対応となりました。パラリンピック選手村にいと、麻痺、切断、視覚障害、知的障害などあらゆる障害を持った方が当たり前に関わり合いながら生活しており、そこにいる健常者も含めて、まさに多様性という言葉の意味を体感できた活動となりました。

・パラリンピック サイクリング選手用宿泊施設（分宿）医務室 理学療法部門

パラリンピック期間の後半では、サイクリングのロード競技（富士スピードウェイ）選手用の宿泊施設における医務室理学療法部門にて活動しました。分村との違いは、選手村としての扱いでは無く、宿泊施設単位で選手が利用する

分宿という扱いになっていることです。この宿泊施設内の1区画を使用して医務室が設置されました。サービス内容は分村と同様で、ここでも理学療法2～3名と鍼灸マッサージ師1～2名が1シフトに入る運用で活動しました。オリンピック期間におけるサイクリング分村と同様、利用者はさほど多くはありませんでしたが、理学療法・マッサージを定期的に受けることでコンディションを整える選手もおり、少なからず需要があることを感じました。また、分宿ということで選手との距離が近く、選手団の帰国時には選手の乗車したバスの見送りをを行い、選手から感謝の声を聞くことができ、不自由な面が多かった宿泊施設での生活であっても、日本流のおもてなしが伝わったと感じられるものでした。

・最後に

オリンピック、パラリンピックを通じて、計30日間の活動することができました。活動を認めていただいた大学関係者の方々にも感謝申し上げます。活動を通して最も印象的だったことは、理学療法サービスを受けた選手が、皆、「サンキュー!」「アリガト!」とって笑顔で帰っていったことです。コロナ禍ということで、感染対策に留意しながらの活動となり、様々なところで「距離をとった」活動となっていた昨今に、言葉はカタコトでしか通じなかったかもしれませんが、アスリート達と少しでも心が近く通じ合えた気がするとともに、スポーツの大きな力を改めて感じた活動となりました。